

交流児童画展 ベン・テマ小学校説明員報告

2016年9月24日

JICA シニア・ボランティア（ボツワナ派遣） 波内 みさ

2016年9月12日～16日にボツワナ共和国ハボロネ市ベン・テマ小学校で開催された交流児童画展において説明員を担当しましたので、そのときに見聞した模様を報告いたします。



児童画展見学の様子

会期中の私が説明員として担当した日・時間帯（午前から昼過ぎまで）は、低学年の子どもたちは先生に引率されてクラスごとに、高学年の子どもたちは休み時間に友達何人かで一緒に展示室を訪れ、見学していました。

低学年はクラスごとに、と言っても1クラスが40人超、さらに、複数のクラスがまとまって来ることもあって、そんなときにはやはりたいへんな騒ぎになります。先頭の先生の近くにいる子どもたちは先生の後ろについて静かに足早に見て回るのですが、後ろの方の子どもたちにうっかり説明員が近づくと、たちまちめいめいが目の前にある絵を指して口々に「これなに、これなに」の集中砲火が始まります。それが「富士山」とか「スカイツリー」ならまだいいのですが、指差す先にあるのは、「コマ（駒）」、「納豆」、「流しそうめん」、「ジャングルジム」、「跳び箱」、「カナヘビ」等々。どれもボツワナでは見られないものなので説明がたいへんです。子どもたちはそんな説明員の苦労は全然顧みず、説明を聞いてもわかったようなわからないような顔をしながらもすぐさま次の絵に興味に移り、次の「これなに、これなに」が始まります。あまりの騒ぎっぷりにだいたい先生が大声で怒り始めて一瞬は静かになるのですが、そこは小学生、すぐに立ち直ってまた元気に「これなに」合戦が復活します。



茅ヶ崎小学校からの絵には、日本の子どもたちが大好きな「握り鮓」の絵がたくさんありましたが、ベン・テマ小学校の子どもたちは鮓を知らないみたいでした。「小さいライス・ボールの上に生の魚を乗せた食べ物」と説明してみたのですが、どのクラスも、へー、と言うくらいで終了。こっちのお米はパラパラなので「米を丸く整形できる」こととか、こちらは白身の川魚を焼いたり揚げたりして食べるのが一般的なので「赤身の魚を生で食べる」こととか、いろいろなことがいちいち想定外のように、にわかに反応のしようがないみたいでした。引率の先生はさすがに鮓を知っているみたいで、「あなたたち、sushiを知らないの？」とか言ってましたが。

その代わりに、こっちの子どもたちにも馴染みのあるものは親近感が湧くようで、スイカ（実はボツワナ原産）、バナナ、ドーナツ、アイスクリーム、プール（砂漠の国でちょっと意外ですが水泳の授業もあるようです）、クリスマス・ツリーとかの絵は食いつきが良かったです。



子どもたちはだいたい、自分たちの知っているもので絵をどんどん解釈していきます。いくつかのクラスの様子を見ましたが、マグロはまず間違いなく「サメ!」、カブトムシは「サソリ!」、三日月は「バナナ!」、鮎屋のカウンターの穴子（これは難しい）は「ヘビ!」という具合です。いやいやそうじゃなくて、と説明したいところですがそんな時間も語学力もない説明員には為す術もなく、「そうだよー、この『ヘビ』、おいしいんだよー」と言って小学生を怯ませていました。

自分たちで休み間にやってくる高学年の子たちは、だいたい静かに見て回り、自分が好きな絵の前で小さい声で友達と話をしたりしていました。女の子たちには着物の絵が人気だったようで、私はこっちが好き、という会話もしていました。お鮎の絵がたくさんあったせいか、「sushiは日本の主食なの?」と聞いてきたのはご愛嬌です。

こちらの3年生に、茅ヶ崎小学校の子どもたちが絵を描いている写真を見せながら「これらの絵は日本の小学校3年生のお友達があなたたちのために描いたものです」と説明したら、ちょっと感じ入ったように絵に見入っていた子もいました。「鉛筆で描いて、色を塗ったの?」と質問する子もいました。高学年の子どもたちは、展示されている絵は日本の小学校3年生が描いたものだと聞くと、びっくりしていました。



日本のこと

ボツワナには5,6千人の中国人が住んでいるそうですが、日本人は現在80人くらいしかいません。ボツワナ国内を走っている乗用車のほとんどは日本からの中古車か廃車なのですが、それでも「日本」という国の知名度はまだまだのようです。

ベン・テマ小学校でも「日本から来ました」と言ってもピンとこないようで、低学年の子どもたちからは「ニーハオー！」と叫ばれたり、高学年の子には「日本と中国はどこが違うのか、具体的に述べよ」と詰問されたりしました。実は、ボツワナ人の大人にもよく同じことを聞かれます。

それでも、高学年の子どもの中には日本は技術国らしいと知っている子もいて、日本にはどんなロボットがあるんだ、日本の街中にはロボットが歩いているのか、と質問されたりしました

(「いや、ロボットは主に工場にいて街中にはいない」と答えたら、ちょっとがっかりされました)。

日本のキャラクターを知ってる子もかなりいました。去年は絵の中の「ピカチュウ」に反応してた子がいたのですが、今年は低学年の女の子たちが絵の中で「ハロー・キティ」を見つけて喜んでいました。一方、その隣に「ドラえもん」の顔があったのですが、そっちには無反応。わざわざ、これ知ってる？と聞いてもどのクラスも首を横に振っていました。「ドラえもん」はまだボツワナに上陸していないようです。

高学年になるとさすがに情報量が増えていて、「僕は『NARUTO』が好き」とかいきなり高度なアニメ・ネタを振ってきたりします。あと、高学年の女の子が何度も何度も「『ボイス・オーバー・フラワーズ』って映画知ってる？」と聞いてくるので、後で調べてみたら、日本のコミックが原作で韓国で制作されたイケメン・ドラマ（「Boys Over Flowers～花より男子」）のこのようでした。ボツワナでも、テレビの影響恐るべし、です。

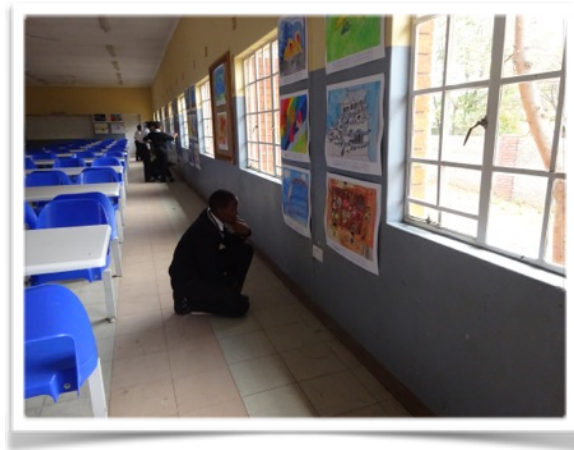
子どもたち

クラスでやってくる低学年の子どもたちは、いったん警戒が解けると、説明員の服を引っ張ったり、手を繋いできたり、まとわりついてきたりします。何人もの子どもたちに、いつ日本に帰るの？一緒に連れて行って！と言われました。見学が終わって教室に帰るときには、みんな順番にハイタッチして出ていきます。誰かが勢いでハグしたら、いったん帰りかけた子も戻ってきてまた順番にハグして出ていきます。ものすごく素直な感情表現です。勢い余った男の子に「You are beautiful!」と言われたりもしました。突っ走りすぎです。

一方、休み時間に来る高学年の子どもたちは、黙って部屋に入ってきて端から順番に静かに見ていきます。説明員と目が合うと、にっこり笑ってくれたり、手を振ってくれたりしました。質問ない？と声をかけても、ちょっと困った顔をして笑って、日本の人口はどれくらいですか、というふうな当たり障りのない質問をして（「1億2千万？オー！」とか言って）離れていきます。



しかし、その平和も束の間、低学年の襲撃は休み時間にも及びました。最初、説明員が一人で展示室に座っていたら、たぶんクラスで既に見学に来た男子二人が入ってきて、下を向いてクスクス笑いながら足早に近づいてきました。どうするんだろうと見ていたら、説明員の横まで来て「コンニチハ！」と言うので「こんにちは」と返したら、すぐまた走って部屋を出ていったのですが、その後、部屋の外で「ジャパニがなんとかかんとか！」と大きな声で笑っているのが聞こえました。まずは、肝試し、だったんですかね。その後は、あのアジア人、休み時間も遊んでくれるらしいと口コミが広がったのか、次々に大小の子どもたちがやってくるようになりました。



休み時間はだいたいみんな、日本語教えてー、と来ます。差し当たり「こんにちは」とか「ありがとう」とかを教えるのですが、なぜか今年は「私の名前はお前の国の言葉でなんと言うんだ」と来る子が結構いました。「プリンセス」とか「フラワー」とかだったらまだいいんですけど、だんだん「授かりもの」とか「チーフ」とか難易度が高くなり、こちらが宙を仰いで途方に暮れていても辛抱強く待っています。仕方がないので、こちらも苦し紛れに「ツヨシ」とか「タケシ」とか多義的な名前を連発するようになりました。将来もし「ツヨシ」とか「タケシ」を名乗るボツワナ人が日本に現れたら、それはたぶん、ベン・テマ小学校の卒業生です（すみません）。

既に日本語の単語をいくつか知っている子も結構いて、遠くから「コンニチハ！」と声をかけて「サヨナラ！」と去っていく子もいました。ただ、多少の情報の混乱も見られ、「俺、日本語喋れる。」という子がいたので、じゃ喋ってみてよ、と言うと「『オナマエハ』〜！」と言います。おー、すごいじゃん、なんて意味？と聞いたらちょっと考えた後、堂々と「フード！」と叫んでくれました。その他にも、私、日本語で数を数えられるわという子がいたので、じゃ数えてみて、と言うと、韓国語で数を言ってみせてくれました。ここでも、ガンバレ日本、です。

空き時間に折り紙を折っていたら、教えてくれ、という子がたくさんきたので、即席折り紙教室もやりました。教えて、という割に、わからなくなったからこの後やってくれ、という子も多かったのですが、飲み込みの早い子はするすると自分で折っていました。

何の教科が好き？と聞いてみたら、意外にも「農業」と答える子が低学年、高学年を通して多かったです。授業で何を育ててるの？と聞いたら、何も育ててない、座学だけだ、と答えます。





それでも好きなんだ？と聞いたら、隅っこの方で「つまんない」と正直に呟く子もいました。ちなみに、ボツワナでは小学校から高校まで「農業」の授業があって、作物の育て方や家畜の飼育方を勉強するのだそうで、小学校では座学ですが、中学校からは実際にヤギを飼ったりするのだそうです。砂漠の国らしい教育方針です。

せっかくなんで写真撮らして一、と言うとどこからか子どもたちが次々に湧いてきて、シャッターを切るごとに子どもの数が増えていきます。そして、みんなひたすら前が出る前に出る、後ろに誰がいるなんて全然関係なし、です。そういう大混乱の写真の一方で、高学年の子どもたちはカメラを向けるとキメ顔を作ってポーズを取り、カメラ視線を外しません。ちょっと日本人的には難易度の高い訓練が子どもの頃から日々行われているようです。

そうやって一緒に騒いでいても、誰かが「Teacher!」と叫んだ途端、わーっとマッハの速度で展示室から走って出て行って、あっという間にみんないなくなります。「Teacher」はこっこの小学生にとって相当怖いようです。実際、クラスで絵を見ている途中で騒いだ子どもが教師にバシバシ頭を叩かれたりしていました。今日はクラスの先生がいないの、と2年生4クラスを引き連れてきた教師は、葉っぱのついた長い木の枝を手に持っていました。用途は確認していません。

おわりに

ベン・テマ小学校は公立小学校なので様々な環境で育っている子どもたちがいるようでした。それでも、今回出会った子どもたちが健やかに育ち、将来、「そう言えば子どもの頃に日本の子どもの絵を見ながら日本人と喋ったことがあるような気がする」と覚えていてくれて、「日本」という国を身近なものに感じてくれるといいな、と思います。

初日の開会式を含めて4日間、短時間ずつの子どもたちとの交流でしたが、個人的にとっても貴重な体験でした。関係者のみなさま、どうもありがとうございました。

(写真：在ボツワナ日本大使館及び著者撮影)